

受入・雑誌

早稲田大学図書館 事務副部長
兼 戸山図書館担当課長 齋藤和子

慶應義塾大学メディアセンター本部
吉田真希子

本日の内容

1. システム選定にあたって何を重視したか
2. 早稲田大学からの報告
3. 慶應義塾大学からの報告
4. 今後の展望

1. システム選定にあたって何を重視したか

- ① **発注書誌の取り込み、書店への発注、支払、予算管理が一連の流れでできること**
 - 発注・支払・予算が大学別に管理できること
 - 書店へのオンライン発注が可能であること
 - 発注書誌作成でOCLC等外部書誌を取り込めること
- ② **さまざまな種類の発注に対応していること**
 - 紙／電子
 - 確定発注／見計らい／継続発注／購読／寄贈・交換
- ③ **雑誌のリニューアル、各種パターンの受入がスムーズにできること**
- ④ **予算消化状況をリアルタイムで確認できること**
- ⑤ **大学の財務システムと連携の仕組みがあること**
- ⑥ **電子原簿で管理できること**

2.早稲田大学からの報告

- 2-1.新システムで目指したこと
- 2-2. 新システムにおけるフロー変更
- 2-3.新システム導入を機に実現できたこと
- 2-4.移行に伴う対応と稼働後に発生した問題
- 2-5.今後の課題

早稲田大学からの報告

2-1.新システムで目指したこと

2019年8月までの問題点

- 発注データ作成を行っているものと行っていないものが混在
→重複発注が後で判明
- 発注価格を入力していない
→発注中金額の把握が困難
- 図書館システムと財務システムとが連携していない
→財務システムに再度入力の手間
- 図書原簿を紙で管理
→Wordや請求書のコピーで作成・
バーコードを貼付・ファイルに綴込・
年度毎に製本etc.の手間

新システムでは：

➡ **全て発注データを作成**

➡ **発注データに価格を入力**

➡ **Almaの支払データを財務システムへ受け渡す**

➡ **Alma上のデータを電子原簿として扱う**

早稲田大学からの報告

2-1. 新システムで目指したこと

- 旧システムで利用していなかった**発注・受入・支払・予算管理の機能を一連の流れで動かす**
- WINEに参加する学内全図書館・図書室での処理を**標準化**
- 紙による原簿管理から**電子原簿へ**

早稲田大学からの報告

2-2.新システムにおけるフロー変更

- 受入センターの設置（中央図書館内）
- 発注処理は各箇所で行う
 - 従来は中央図書館・各キャンパス図書館分について業務委託で集中処理
 - 確認のためのやりとりが生じ却って非効率
- 雑誌についても発注・所蔵（物理単位）のデータを作成
- 電子資料もシステムに登録
- 財務システムとの連携（支払データを作成）
- 月1回のまとめ請求を業者に依頼

旧システムとの比較：図書選書～発注

* 中央図書館・各キャンパス図書館の場合の例

旧システム時

<各箇所>

選書

<委託業者>

発注データ作成

- ・ 予定価格は入力せず

<委託業者>

書店へ発注

- ・ 発注票受け渡し

<各箇所>

書店へ発注

- ・ 書店サイトから発注
- ・ メール送信（手動で作成）
- ・ 営業さんへ直接等

- ・ 発注レコードは作ったり作らなかったり
= 他箇所の発注状況が把握できない
- ・ 価格が入っていない
= 発注中の金額合計がわからない

Alma導入後

<各箇所>

選書

<各箇所>

発注データ作成

- ・ 予定価格を入力

<各箇所>

書店へ発注

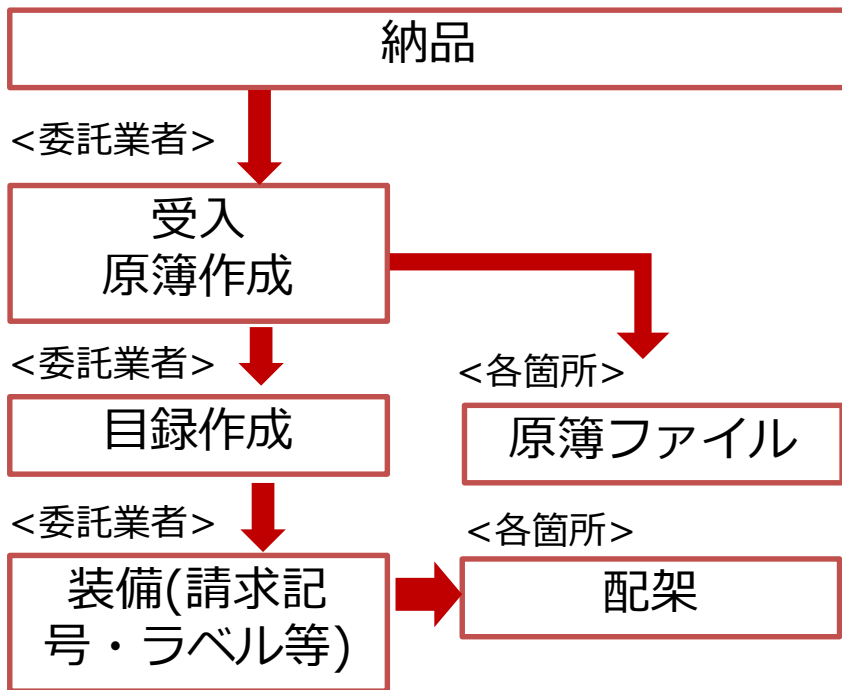
- ・ Almaからのメール送信
- ・ 書店サイトから発注

- ・ すべて発注レコードを作成
= 他箇所の発注状況も把握できる
- ・ 予定価格を入力
= 発注中の金額合計が容易に把握できる
- ・ Almaに登録したデータから発注
= メールに再度打ち込まなくてよい

旧システムとの比較：受入～目録～配架

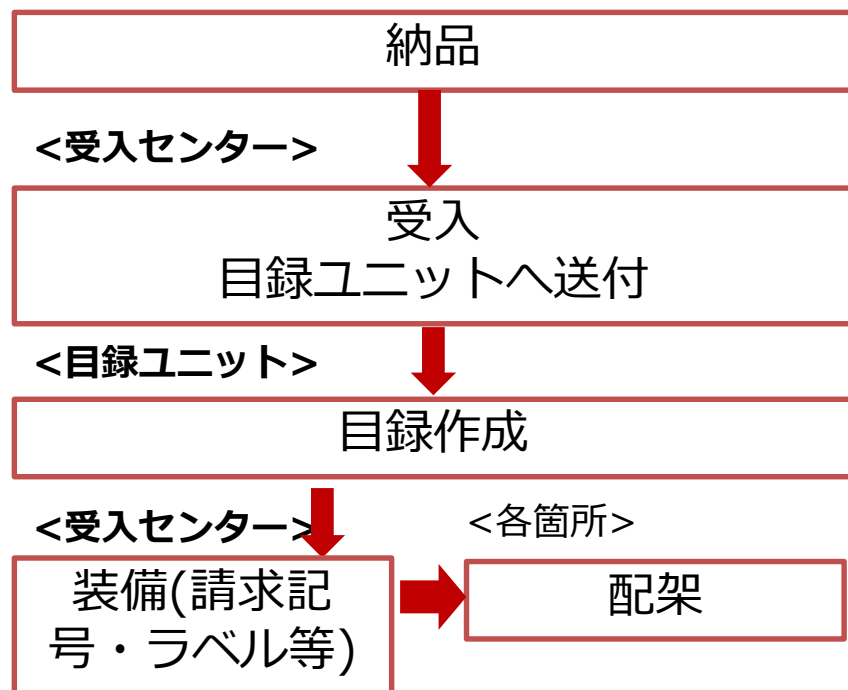
* 中央図書館・各キャンパス図書館の場合の例

旧システム時



・紙で原簿を作成 =作成とファイルの手間、保管スペース必要、原簿製本の費用

Alma導入後



・電子原簿 =紙で作成・保管不要

旧システムとの比較：支払

* 中央図書館・各キャンパス図書館の場合の例

旧システム時

請求書受領（納品の都度）

<委託業者>

請求書に費目等記入

<各箇所>

請求内容確認

<経理担当者>

財務システム入力／請求書ファイル

業者へ支払

- ・ 財務システムで改めてデータを入力
- ・ 予算使用実績はExcel管理または財務システムにログインして確認

Alma導入後（月1回まとめ請求の場合）

納品時に納品票受領（請求予定金額記載）

<受入センター>

Almaに請求データ入力

請求データを出力(自動)

<経理担当者>

業者より月1回まとめ請求書受領／確認／
ファイル

<各箇所>

請求内容確認

Almaから財務システムへデータ受渡
業者へ支払

- ・ 納品時に請求金額入力 = Almaでリアルタイムで予算使用実績把握可能
- ・ Almaと財務システムとの連携 = 再度の入力不要

早稲田大学からの報告

2-3. 新システム導入を機に実現できたこと

- 処理の標準化
- 全図書館・図書室の発注状況が参照可能に
- 電子媒体・紙媒体の所蔵の両方が容易にわかるように
- 資料のライフサイクルをデータとして保存
(発注～支払、各Itemの変更履歴)
- 紙の原簿管理が不要に (省力化、経費節減、
スペース節減)
- リアルタイムでの予算執行状況の参照

早稲田大学からの報告

2-4 .移行に伴う対応と稼働後に発生した問題

- 一定期間(7月～8月末)発注・受入を停止
→滞貨の発生、解消に時間を要する
- 事前に旧システムのデータ整備
- テスト移行（2回）の結果をみて移行の仕様を修正
→移行できなかった継続発注のデータはシステム稼働後に作成
- マニュアル作成、スタッフ研修
→まだ必要なマニュアルが整わない／各箇所からの多数の問い合わせ対応
→システムに不慣れなことによる処理遅延
- 取引先業者向け説明会（発注、まとめ請求等）

早稲田大学からの報告

2-4 . 移行に伴う対応と稼働後に発生した問題

- 雑誌の所蔵レコードに巻号・出版年のデータが入っていないため、PrimoVE上で巻号順に並ばない現象が発生
 - 1件ずつ手動でデータを修正するしかなく、利用頻度の高いタイトルから手動で修正を行う方向で検討中

早稲田大学からの報告 2-5. 今後の課題

- 標準化をさらにすすめること
- 再び各箇所独自の処理に戻らないように注意
- 継続資料の支払予定額の把握
- 書店の発注サイトとの連携・EDI連携
(2020年4月～予定)
⇒発注、支払業務の効率アップ
- 電子媒体資料との重複状況が把握しやすくなったことを活かし、電子版への移行を検討

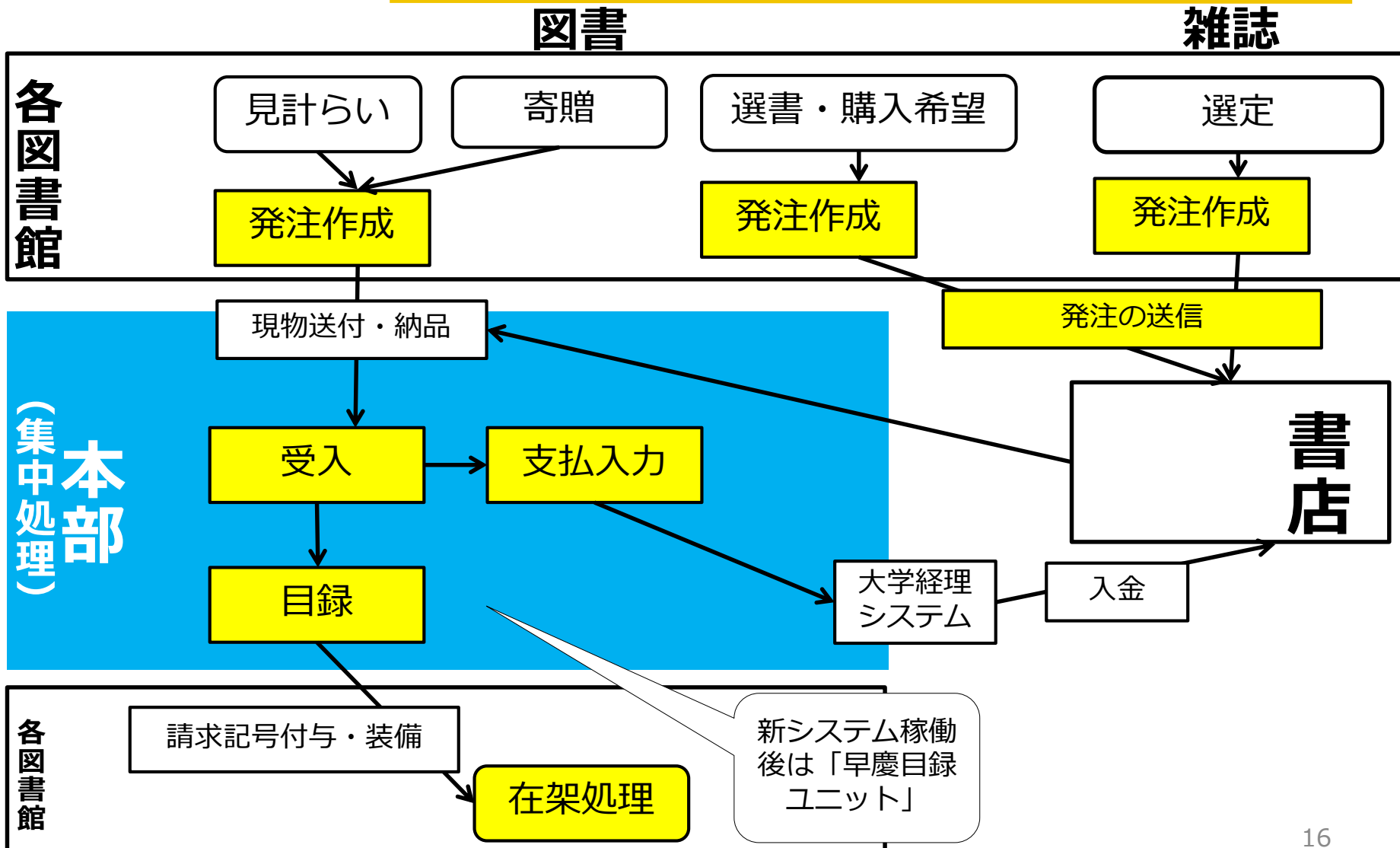
3. 慶應義塾大学からの報告

Acquisition = 発注・受入・支払

- 3-1. 業務フローと集中処理
- 3-2. 新システム導入に際して
- 3-3. 新システムで目指したこと
- 3-4. 新システムで実現できたこと
- 3-5. 受入に関するデータとリンク構造
- 3-6. 稼働後に発生した問題
- 3-7. 課題と展望

慶應からの報告

3-1.業務フローと集中処理



慶應からの報告

3-2.新システム導入に際して

1998~本部での集中処理開始

2010~Ex Libris社のAlephを導入

Alephで発注・受入・支払・予算を管理(電子原簿)

今までの業務
フローを実現
したい

- 基本の業務フローは変更しない
- 後継システムだと考えていたが…
 - 紙と電子両方を取り扱えるが、電子を重視しており、紙に関する機能・項目は少なくなった
- 新システム導入で何を目指すか？

慶應からの報告

3-3.新システムで目指したこと

① EDIを利用した発注・支払の効率化

- EDI(Electronic Data Interchange)とは？
受発注・納品・請求・支払までの取引データを
企業間でやり取りする仕組み。
- 対象：購入図書「発注」「支払」
- 丸善雄松堂書店、紀伊國屋書店、生協

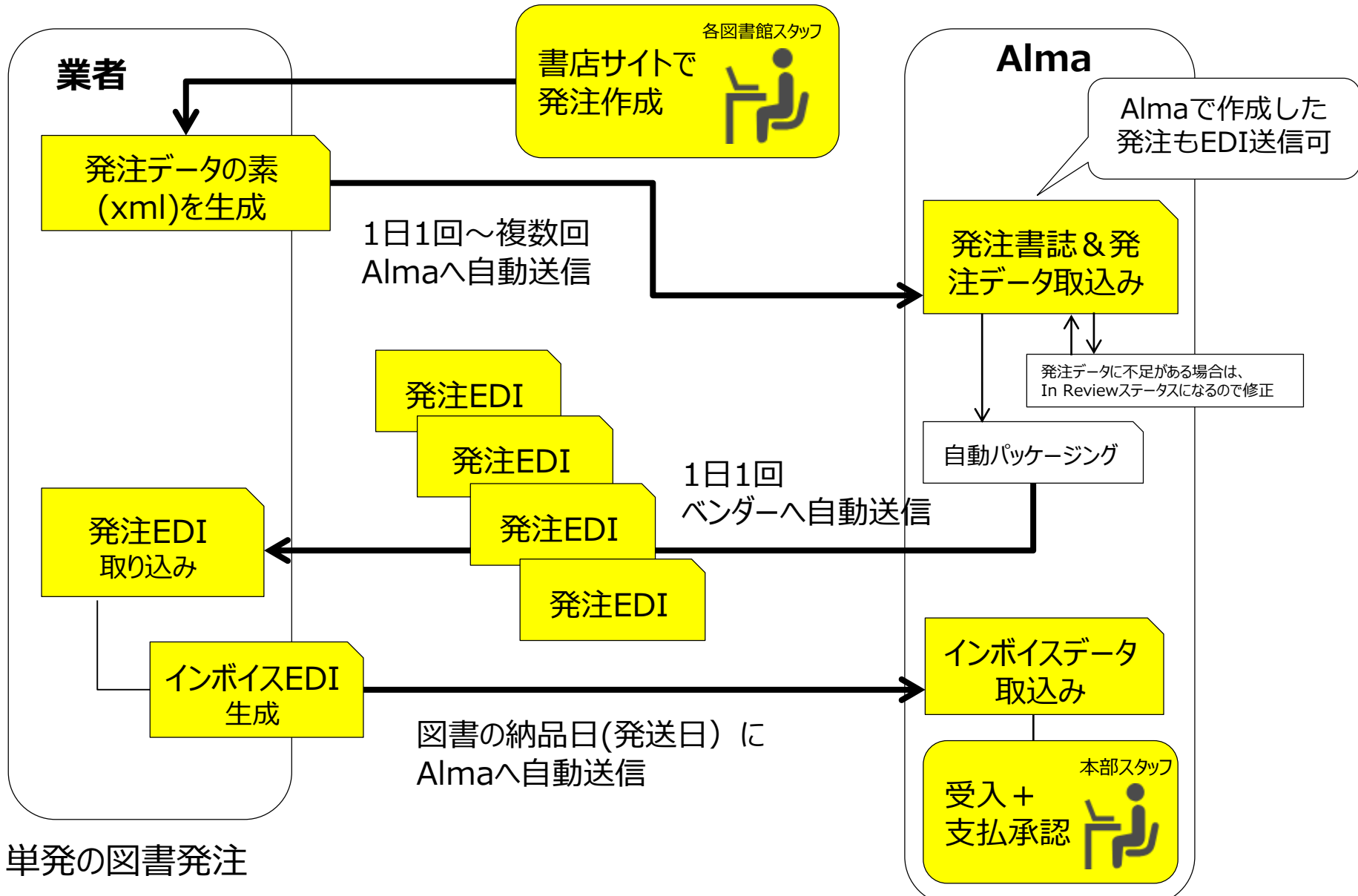
② 書店サイトとの連携（発注の作成）

- 丸善雄松堂ナレッジワーカー、紀伊國屋PLATON
- メリット①発注書誌の作成が簡単
- メリット②書店サイトだけで発注が作れる
- メリット③Alma内の発注とも重複調査可

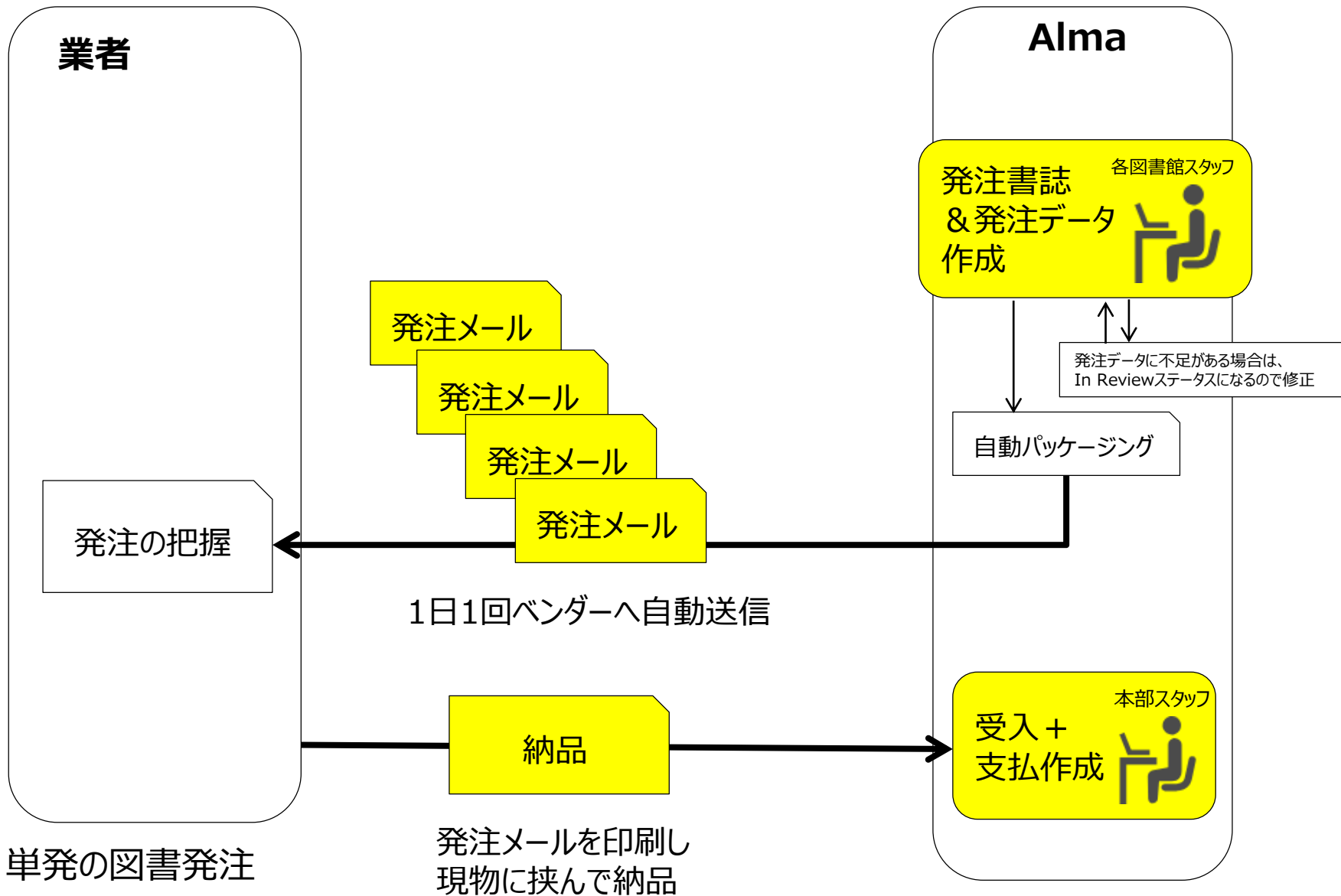
➡2018年3月各社に打診、2018年9月～2019年7月開発

➡2019年9月より運用開始(生協は10月より)

書店サイト & EDI発注



EDI以外の発注(メール)



慶應からの報告 EDIの導入結果

• メリット

- ① 図書の支払作業が大幅にスピードアップ
- ② 図書館側での開発が不要
- ③ 納品の有無が即日分かる

• 苦勞した点、留意する点

- ① EDIフォーマット改修のためのEx Librisとの交渉
 - 1大学の事情では対応してもらえない
 - 早慶共通で日本向けであることを強調
- ② トラブル発生原因調査➡システム担当と書店の協力必須
- ③ 完全自動化➡エラーを見落とさない工夫

• EDIの使用率

- 発注：購入図書の52.6% (2020年1月)
- 支払：購入図書の49.6% (2020年2月末払い)

慶應からの報告

3-3. 新システムで目指したこと

③ ペーパーレス

- そもそも帳票の印刷機能が無い
- 発注票を廃止

④ 継続図書の一元管理

- 外付けシステムを廃止し、Almaで管理

⑤ 雑誌の所蔵範囲の自動表示

- 継続中の約9000誌について、毎年Holding Recordの記述を手動で更新していたが廃止
- Primo VEの機能からアイテム情報で自動表示

⑥ 外付けシステムの廃止

慶應からの報告

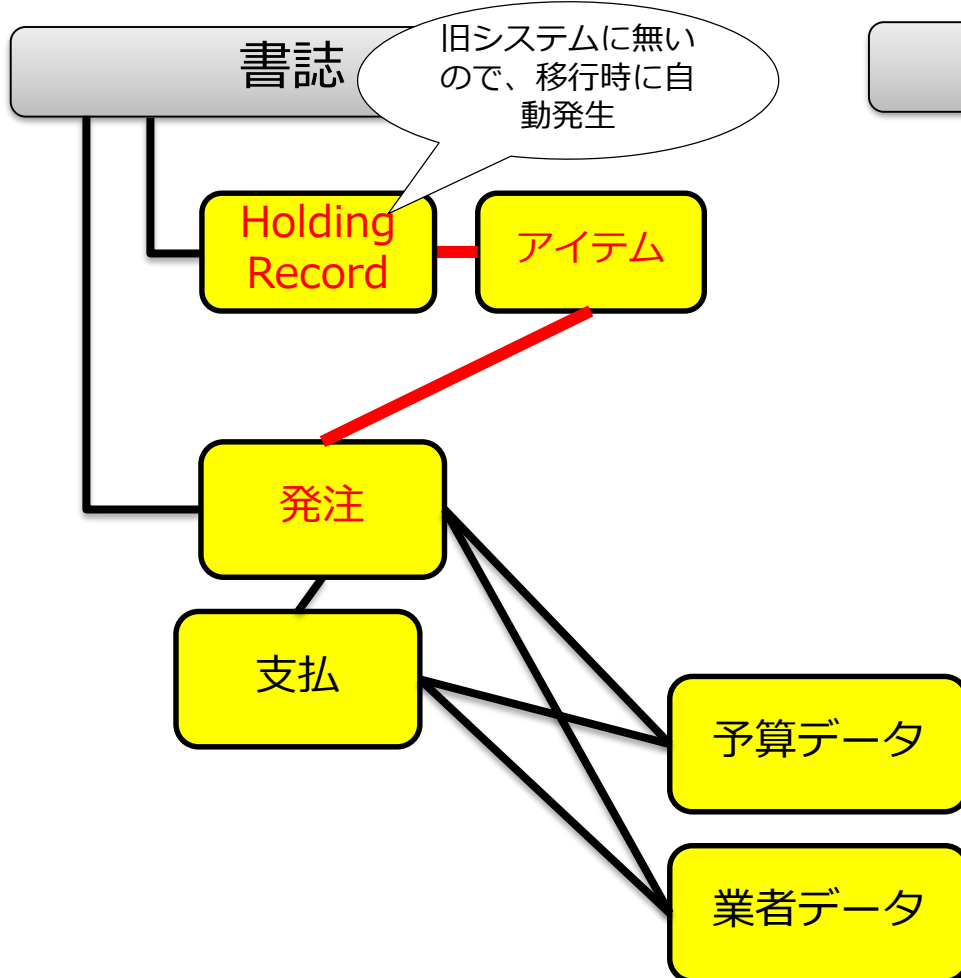
3-4.新システムで実現できたこと

- **目標分⇒無事に運用開始**
 - EDIを利用した発注・支払の効率化、書店サイト、ペーパーレス、継続図書、雑誌所蔵範囲表示
- **発注と受入の安定運用**
 - ⇒ **移行前1.5カ月の停止後「比較的」順調に通常量へ**
 - 受入→4カ月後(2019年12月末)に滞貨(受入待ち)解消
 - 発注→1カ月から前年度以上の数を作成。年間では5,000減
- **効率化に役に立った機能**
 - 支払データのEXCEL一括登録 (雑誌のまとめ払い)
 - 発注データのEXCEL一括登録 (学位論文、見計らい)
 - Analytics(分析)機能の豊富さ

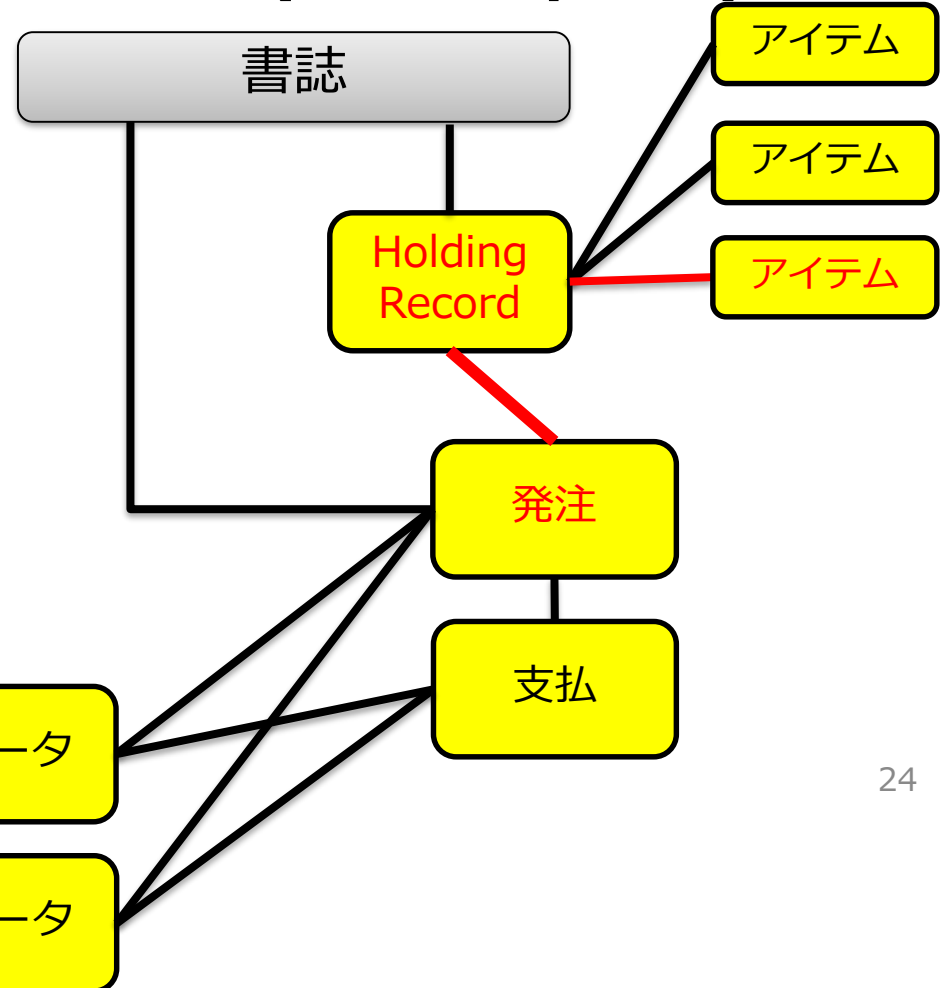
慶應からの報告

3-5. 受入に関するデータとリンク構造

図書発注(Onetime)



雑誌発注(Subscription)



慶應からの報告

3-6. 稼働後に発生した問題

- **雑誌の受入作業時間が大幅に増えた**
 - クラウド環境のためか操作速度が遅いことが原因
 - タブ切り替え、画面切り替え、クリック後に時間がかかる
- **処理が完全自動化されていることの影響**
 - スタッフが理解して慣れるまでの経験が必要
- **新ディスクバリーで多巻物や雑誌の所蔵が見にくい**
 - Primo VEでの所蔵表示はHolding Recordが優先することが原因
 - 可能な範囲でデータを一括修正
- **アイテムの配置場所を変更したら発注とリンクが切れた**
 - 発注種別がSubscription(雑誌)タイプだと発生。発注種別によりアイテム～Holding Record～発注の間のリンク構造が異なることが原因
 - システム上で電子原簿を維持することの難しさ

慶應からの報告

3-7. 課題と展望

- **運用の定着と安定化**
 - マニュアルの完備と拡張、問い合わせ対応
- **毎月のリリース後の対応**
 - 突然の不具合、知らぬ間のラベル名・機能変更
- **EDIによる雑誌受入の可能性**
 - 「巻号表示」「疑似巻次」部分が課題か
- **図書自動クレームの開始(2020.4予定)**
 - 納品日から受入日までの最大日数は要検討
- **分析機能(Analytics)の活用**

4.早慶：今後の展望

- **発注情報の共有を活用した、Shared Printのための選書の可能性**
 - 予算・価格・書店などは共有していないが、早慶での発注と所蔵の有無が簡単に確認可能
- **早慶でのEDI発注開始**
 - 対応業者拡大への期待
- **早慶でのAlma知識共有**